多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2012　年　5　月　31　日

派遣者氏名（専門分野）	野々村　梓　　（　　哲学　　）

下記のとおり報告します。
記

研究テーマ	デカルト哲学を中心とする 17・18 世紀フランスにおける「人間」概念の布置に関する思想史的研究

派遣期間

2011 年　11 月　30 日　　～　2011 年　　12 月　15 日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	フランス	パリ	フランス国立図書館	
	フランス	パリ	エコール・ノルマル・シュペリウール	ドゥニ・カンブシュネル教授（パリ第一大学）

派遣先で実施した研究内容

[研究内容の概要]デカルト Descartes, René（1596-1650）は，その形而上学において，魂と身体を根源的に区別し，いわゆる「デカルト的二元論」を展開した哲学者として知られる．他方で，彼は魂と身体を同時にもつ一個の「人間」を重視し，「生の有用性」へと向けて，広大な哲学体系（その終局には道徳がある）を構想してもいた．魂の非物質性と三次元における延長をその本質とする物体概念を確立し，その結果として魂を身体から厳密に区別するデカルトの形而上学が，どのようにして一個の人間について，また心身の因果的作用によって世界のうちで行為する人間を扱うことができるのか．これが，本研究の問いである．ところで，デカルト自身は，心身合一が当時の思想家のうちに惹起した困難を深刻な問題として引き受けなかった．その一方で，とりわけデカルト哲学を継承・発展させた小カルテジアンと呼び習わされるデカルト以後の思想家にとって，非物質的な魂が物体と因果的な関係をもつということはやはり問題であった．それを，17-18 世紀の機会原因論や感覚主義の発展のうちに見てとることができよう．魂と物体の厳密な区別，デカルト哲学の不可欠の要素としての心身合一、そして心身合一（魂と身体の因果的相互作用）のデカルト以後における問題化の原因のひとつが魂と身体間に想定される因果性であったこと，これらを勘案してみるに，デカルト哲学において，魂と身体の区別からそれらを含みもつ全体としての人間へ，ということはつまり形而上学から道徳へと繋がる過程を支えていたのは彼の因果性の概念（そして，おそらくデカルト以後の思想家とは違う概念）であったのではないか，そういう仮説に至る．この仮説を検証するために，今回の派遣では実施可能な課題として以下を行った．

1. 1641 年に出版された『省察』*Meditationes de Prima Philosophia* の「第六省察」では，さきに述べた区別と心身合一がともに主張されているのみならず，身体から「実在的に realiter」区別された魂が，まさに「能動-受動」という因果性に依拠して，魂の外部にある物体=身体へと超え出ていこう

とするテキストである．その意味で，本研究にとって重要なテキストである．これまでラテン語版と仏訳版の異同にも注意を払いつつ研究を進めてきたが，今回はさらにそれを補完し，かつ「第六省察」の受容史研究に資するとの見通しをもって，René Fédé（1649-1716）による仏訳第三版の閲覧を行った．

Descartes, René（Éditeur: Fédé, René)
——*Les Méditations métaphysiques de René Descartes*... nouvellement divisées par articles avec des sommaires à costé, et avec des renvois des articles aux objections et des objections aux responses... Par R. F. [René Fédé.] 3e édition

2. 上記課題を哲学史的に裏づける作業の一環として，後期スコラと小カルテジアンのテキストから，国内で閲覧できないものに絞って，時間の許す限り閲覧を行った．閲覧したテキストは以下のとおり．

Toledo, Francisco de
——*Commentaria, una cum quaestionibus, in octo libros Aristotelis "De Physica auscultatione"* (1581)
Rohault, Jacques
——*Entretiens sur la philosophie* (1671)
——*Traité de physique* (1671)

3. 研究会参加：パリ第一大学のカンブシュネル教授の紹介により，Séminaire Descartes（François Duchesneau , *Leibniz, le vivant et l'organism*, Vrin, 2010 を巡る討議）に参加した．

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

1. 『省察』仏訳第三版の調査: 既に邦語研究によって,『省察』の仏訳テキストは,『省察』ラテン語テキストに比べて，信頼性において劣ると指摘されており,「第六省察」のテキストにおいてもそれが確認される．そのため，仏訳第三版を調査するにあたって，AT 版所収の仏訳よりさらに誤解を招くような訳語の選択がなされているのではないか、と推測していた．予想に反して、第三版のテキストは、すくなくとも閲覧した箇所では、ラテン語のテキストにきわめて忠実な、場合によってはラテン語をそのままフランス語に移し換えた訳語が選択されていることが確認された．

2. Rohault のテキスト調査では，因果概念を中心にして心身の相互作用や心身合一の議論におけるデカルトとの違い，そしてその違いの理由を明らかにすることが当初の目的であった．「身体」の認識がデカルトの場合とは反対に、受動よりはむしろ身体を動かすというような，意志的運動の発動に依拠しており，細かなところでは，相違が認められるものの，それらが実際に因果概念の変遷を映し出しているのかどうかについては顕著な相違を見出し得なかった．それと関連して,『哲学についての対話』では，人間が純粋な機械ではないことの論拠は，人間の魂の「思惟する」ことであるとされており，デカルトが魂と身体をもった「人間」を開示するために感覚・受動をその論拠として提示したことを考えれば，両者の間に違いが認められるように思われる．ただしこれらが実際にどのような含意をもつのかについての分析，ならびにスコラ哲学のテキスト読解（アリストテレス註解のため，アリストテレスのテキストとの付き合わせを含む）は今後の課題である．

派遣後の研究発表の予定

収集した資料の整理・分析を進め，その成果を 2012 年日仏哲学会春季大会（秋季大会に変更の可能性あり）に発表する予定である.